

解説

◆記者の眼

日中の戦後70年



佐藤 大

中国では「抗日戦争勝利七十年」を記念して、軍事パレードなどのイベントが相次いで開かれている。七十年を経ての「抗日行事」に反発を覚える日本人も多いだろうが、プロパガンダの向こう側にある庶民の「痛み」は忘れてはならない。

八月十五日、リニョアールしたばかりの北京の「中国人民抗日戦争記念館」に出掛けた。明らかに動員らしき小学生たちも交じり、大勢の人でごった返していた。展示は、中国が「反ファシズム戦争」の東アジアの主戦場だった、との主張で貫かれている。旧日本兵の残虐性を強調するような写真資料は以前より減った印象はあるが、やはりある。一九七二年の日中国交正常化以降の友好関係を記録したコーナーもあった。出口付近に感想を残すコーナーがあり、子どもたちが熱心に書き込んでいた。「国の恥を忘れるな」とのコメントに交じり、「日本人が嫌いになった」などと日本や日本人に対する敵意すら感じさせる書き込みが多く見られた。それらを受けた女子学生が、「このような考え方を小さな子どもたちに植え付けるのは、日本にとっては不公平ではない

中国民衆の痛み 忘れまい

か」という意見を書いていたのが救いだ。展示は「平和を大切にするため」とされているが、子どもたちの素直な反応を見れば、それは成功しているとは言えない。一方で、反応すべてが「教育」のせいばかりとも思えない。

中国の田舎を訪れると、戦争の生々しい記憶に触れることがある。もはや直接被害を受けた人に出会うことはほとんどないが、孫の世代から「祖父が殺されたから日本人が嫌い」と言われたことがある。普段は理性的に振る舞う知識人も、心の奥に日本への恨みがあると吐露した。日本で「加害の記憶」はどれだけ受け継がれてきただろう。特に若い世代の

風化を危惧する。極端な例だと思いたいが、「七三一部隊を知らない日本人留学生がいた」と怒っていた中国人もいた。侵略を否定するかのような政治家らの発言は、中国の人々の心の傷に塩を塗っている。

戦後生まれがほとんどとなった今、「いつまで謝り続けなければいけないのか」というムードが日本で広がるもの分らないではない。だが、現在の日本の平和や繁栄があの戦争を経てある以上、戦時に旧日本軍がしてきたことは直視し続けなければならないと思う。七十年が過ぎようとして、あの戦争とは何だったのか、を知る努力を放棄してはならない。(前中国総局)

歴史認識[編集]

青山 繁晴

- ・ アメリカ合衆国下院 121 号決議に反対する意見広告(THE FACTS)の賛同人として名を連ねている。

・ 731 部隊が行ったとされる細菌実験や人体実験については、「その証拠が残っており、動かし難い事実である」との立場である。「中国は「南京大虐殺」の問題に決着が付いた後、次の歴史カードとして 731 部隊の問題を出してくる」とし、日本は先手を打って 731 部隊を議題にし、日中共同の歴史研究をもう一度やり直すべきであり、日本に都合の悪い部分も全部出すことによって、初めてカードを封じ込めることができると述べている^[53]。

「日中の興亡」186 - 187 頁 2008

- ・ 真珠湾攻撃は、米国によって巻き込まれた陰謀だったと主張している(真珠湾攻撃陰謀説)。^[54]

